

2025年11月30日

アドベント第一週礼拝説教要約

慰めなる神の時

(イザヤ40・1～8)

一、イザヤは何人いたか

今日「イザヤ書」と言えば、一人のイザヤが書いたとして解説している書物は、非常に少ないです。私自身がどのように受け止めているかについては、これまで幾度か語りましたが、非常に悩みました。「イザヤは一人ではあり得ない」と考えた理由は、44章と45章にキュロスの名が出てくることでした。

キュロスと言えば、紀元前6世紀、古代ペルシア帝国アケメネス朝の実力者であった王の名です。一方で、預言者イザヤは紀元前8世紀、南王国ユダの預言者です。預言者イザヤとキュロス王の間には約200年の隔たりがあり、その間に北王国イスラエルがアッシリア帝国によって滅亡し、南王国ユダもバビロン軍によって破壊され、バビロン捕囚という憂き目がありました。ところがイザヤ書44章28節、また45章1節、2節に「キュロス」の名が出てまいります。さんざんに悩んでいた時のことです。カトリックのフランススコ会訳聖書に書かれている短い解説によって、目からうろこが落ちたような気持ちになりました。フランススコ会訳は、本文こそは第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤ

に分けていますが、解説部分にこういうことばがありました。(略)現在われわれの手にある書は、恐らくイザヤ自身が書いたものから始まり、次々に書かれて一部改訂された資料を用いて今ある形のものを作り出した、一人の編集者著者による作品とする説。今日では「この」説に属する見解を受け入れる学者がますます多くなっている。」と。こう理解しますと、キュロスに関する預言もイザヤがしたことになります。ただし、イザヤが預言した時点ではキュロスの名は入っておらず、もう一人のイザヤではなく、イザヤの系譜を継ぐ後の弟子たちが書き入れたものであると、考えられるわけです。

二、慰めなる神の時

40章1節を見てまいります。〈慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——〉とあります。これは第二イザヤ、すなわちもう一人のイザヤのことばではなく、紀元前8世紀のイザヤのことばです。「そういう立場をとる」ではなく、正真正銘預言者イザヤのことばであると、私は考えます。イザヤは、南王国ユダの、主への反逆のゆえに、自国が滅びると示されていた。同時に、ユダが回復すると示されていました。もちろん全員が回復する、すなわち主に立ち返るのではなく、一部の「残りの者たち」です。こ

うして、主は預言者たちに、一様にあるメッセージを語っています。それは、主は反逆者たちをさばかれるものの、いつまでもではない、という預言のことばです。やがてイスラエルが回復する時が来るというメッセージです。〈慰めよ、慰めよ、わたしの民を〉は、まさしく、主の慰めの時が来たという預言です。このことばを語られたのは、たしかに主ですから、1節2行目でイザヤは、〈あなたがたの神は仰せられる〉と語っています。続いて2節です。〈エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを主の手から受けている、と。〉とあります。まさしく主はいつまでも怒っておられない神です。

3節、4節は、不思議な神の働きです。〈荒野で叫ぶ者の声がする。主の道を用意せよ。荒れ地で私たちの神のために、大路をまつすぐにせよ。すべての谷は引き上げられ、すべての山や丘は低くなる。曲がったところはまっすぐになり、険しい地は平らになる。〉とあります。神は、歴史の隠れたところで働いておられます。3節1行目の〈荒野で叫ぶ者の声がする〉がまさしくそうです。このことばは、だれが語っているのでしょうか。6節の〈叫べ〉と言う者の声がする」とも重なりますが、御霊の声、聖霊の声です。6節を見てまいります。

〈「叫べ」と言う者の声がする。何と叫びましょうか」と人は言う。「人はみな草のよう。その栄えはみな野の花のようだ。〉とあります。だれが「叫べ」と語っているのでしょうか。御霊であり、聖霊です。続いて2行目に〈何と叫びましょうか〉と人は言う」とあります。が、〈人〉とは、だれなのでしょう。口語訳と新改訳旧版、新共同訳、聖書協会共同訳は「私」、すなわち「預言者イザヤ」と理解しています。新改訳2017だけが「人」としていますが、これも良い理解かと思います。御霊が語る〈「叫べ」と言う者の声〉に応答して、「何と叫びましょうか」と応答する人がいるという解釈には「なるほど」と思われます。まさしく、御霊の語りかけに応答する人が、イザヤに限らず、どこにでも居るということです。6節3行目から8節までより、この世のものはすべて一時的であり、永遠に変わらないのは神のことばであり、神のことばなるキリストの善き知らせであると、聞くことができます。

三、私たちへの適用

40章31節に〈しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることができる。走っても力衰えず、歩いても疲れない。〉とあります。私たちは、隠れたところにおられる神を信じ、主を待ち望む姿勢が大切です。